

江戸後期の職業詩人研究

—大窪詩仏を中心として—

概要書

○本論文の研究対象

本論文は、江戸後期の職業詩人を研究対象とし、その代表者の一人である大窪詩仏を例として考察したものである。

職業詩人の大量の出現は江戸後期の一つ特徴として、学界においてすでに認められているが、専著はいまだ見られない。しかしながら、職業詩人の出現は日本漢詩に大きな影響が与えている。それは、従来の作詩主体であった貴族、僧侶、儒者などとはまったく異なる生存方式、作詩活動を採っていたからである。本論はおもに彼らの実際の身分、経歴や著作、そして周りの環境変化などから、漢詩専門化の過程を明らかにしたものである。

詳しく分析するために、その代表者の一人である大窪詩仏を考察の中心にすえて、日本における早期の職業詩人の諸活動を詳細に洗い出すことを第一の目的とする。また、この時期の文人は高度に集団化していたため、詩仏が所属する漢学塾（奚疑塾）、詩社（江湖詩社）のリーダーと成員たちも補足として論じる。

本論のもう一つの着目は日中比較研究である。中国における先例や類例にも注意を払い、その影響関係や異同について検討を加える等、日中比較詩学の観点からも光を当て、より総合的に職業詩人の詩作活動の意味と特徴を探求してゆきたい。その対比対象はおもに南宋末期に誕生した江湖詩派の詩人であるが、彼らは宋王朝の滅亡によって、職業詩人として発展が中断した。また、今日に流伝している資料も不足があるため、論述によって、元・明・清に生きる職業詩人も比較対象とした。日中の時代と環境の差異を視野に入れながら、両国の職業詩人の生存方式における類似点を指摘したことも本論の主要な内容である。

○本論文の構成

序章は本論文における研究に必要な知識背景と基礎的概念を説明した。本論文の研究対象である職業詩人に関する日中における誕生時間のズレと原因を検討し、職業詩人の概念を紹介した。

まずは本論の構成を紹介する。正文は凡そ「江戸後期の作詩環境」、「大窪詩仏の詩論と詩」という二部分によって構成される。前半部「江戸後期の作詩環境」は内容によって三部分に分かれる。「Ⅰ 職業詩人の誕生」は第一章から第三章までであり、江戸時代における職業詩人が如何にして誕生し、如何にして生存していたのかという問題について検討を行った。「Ⅱ 職業詩人のリーダーと成員構成」は第四章から第五章までであり、詩仏の師である二人、市河寛斎と山本北山を検討対象とし、前者に関しては江湖詩社を成立した理由、後者に関しては町儒者としての特質および奚疑塾の性質について論じた。「Ⅲ 職業詩人活躍の場」は第六章から第八章までであり、職業詩人が参加した詩社、詩会と書画会を検討し、江戸という大都市における職業詩人の活動を考察した。後半部「Ⅱ 大窪詩仏の詩論と詩」は二部分に分かれる。「Ⅳ 職業詩人の詩風変革」は第九章から第十章までであり、大窪詩仏が山本北山の下で、どのような詩論を持ったのかについて論じた。「Ⅴ 大窪詩仏の詩―中国詩との比較―」は第十一章から第十二章までであり、大窪詩仏の漢詩と中国の漢詩を対比しつつ、その特徴を洗い出した。

以下、各章の内容を具体的に紹介する。

第一章「職業詩人の誕生」は日本の漢詩がどのような階層の人々によって作られてきたのか、という観点を中心にすえて、日本漢詩の歴史を概観した。そのほかにも、江戸時代に誕生した「職業詩人」の萌芽およびその発展を紹介した。第(二)節「中国における民間詩人の興起」はまず中国における詩人の社会階層状況を確認し、南宋末期に現れた民間詩人を紹介した。第(三)節「日本漢詩の創作主体の変化―江村北海の『日本詩史』を参考に―」は江村北海の『日本詩史』を手掛かりとして、江戸時代、漢詩の創作主体が貴族や僧侶から庶民(布衣)へ変わったことを紹介した。第(四)節「江戸時代における儒学興隆と町儒者

の増加」は江戸時代の儒者、とくに町儒者の増加を紹介して、儒学と政治の関係性から出發して詩人が儒者から独立していったことを論じた。第五節「職業詩人の萌芽」は儒者から独立した職業詩人の先駆たちを紹介した。第六節は江戸後期、職業詩人が大量に出現することを論じた。

第二章 「職業文人の生き方―大窪詩仏を例に―」は化政期の職業詩人（とくに大窪詩仏を例に）を考察対象として、中国の明清時代の文人と対比しつつ、その生存方式および生計問題を考察した。第二節「明清時代の職業文人」は中国の明清時代の職業詩人の生活手段および世人による批評を紹介した。第三節「江戸後期の職業詩人の生計―大窪詩仏を例に―」は「イ、詩文を教授すること」、「ロ、権貴の支援」、「ハ、詩文書画を売ること」、「ニ、職業詩人の旅」、「ホ、出版事業及び出仕問題」に分かれており、江戸後期（詩仏を例に）がいかんにして資金を醸出していたのかということ検討しながら、明清文人の生計と比較した。

第三章 「大窪詩仏の出版活動とその特徴」は第二章で詳しく分析しなかった出版の問題をさらに検討した。おもに江戸時代の詩人たちの出版に対する意識の変化を紹介した。第二節「個人の別集の出版」と第三節「詞華集の編纂」で検討するように、詩集の出版に対する意識は批判から賛同へと変化する。第四節「宋詩選集の出版」は詩仏に関わる宋詩選集の刊行状況を整理した。彼らが用いた底本は、宋人の別集ではなく、ほとんどが清人の編選にかかる選集であったことを説明した。

第四章 「市河寛齋詩中の「江湖」と江湖詩社―南宋江湖詩派との繋がり兼論する―」で主に論じたのは「江湖」が寛齋の詩に現れるのは彼が政治に失意した頃であり、江湖詩社は寛齋が南宋の江湖詩派の名に倣い、周囲の庶民詩人を集めた集団であったということである。第二節「天明六年に市河寛齋が詠んだ「江湖」」は天明六年に寛齋の詩に多出する「江湖」の語の意味を検討した。第三節「江湖詩社と江湖詩派の関係」は詩社の命名から両者の繋がりを討論した。第四節「江湖詩社の四霊」はさらに江湖詩社の成員と中国南宋時代の江湖詩派の関係を考察した。最後に、第五節は江湖詩社の発展を紹介した。

第五章 「山本北山及び奚疑塾の人たち―大窪詩仏の交遊ネットワーク―」の第二節「町儒者としての山本北山」は北山が町儒者として受けた批判から、彼の性格および町儒者としての功名心を分析した。第三節「奚疑塾の性質」は奚疑塾の成員の身分から、塾の性質を明らかにした。奚疑塾は開放的であり、多様な業界の人士が集まり、とりわけ町人が主たる塾生であった。第四節「奚疑塾と秋田藩」は奚疑塾と秋田藩との関わりを検討した。

家老たちと付き合うことによって、親しい藩から門弟を集めていたことが分かった。

第六章 「日中の民間詩社概説―その教育機能をめぐって―」は日中民間詩社の流行について論じた。第(一)節「中国における民間の詩社」は宋元時代に流行した詩社および科挙制度を摸擬して競作していたことを検討した。また明清時代まで、しだいに多様化してゆく様子も簡潔に紹介した。第(三)節「江戸時代前・中期の民間詩社」は江戸前中期の儒者の詩社について紹介した。享保年間には、すでに民間に結社の風潮があったことが分かった。一方、中国の詩社が多様性を呈することに比べ、江戸の民間詩社は主に若手詩人を教育する機能を發揮してゆく。第(四)節「江戸後期の民間詩社―詩仏と化政期の詩社―」は詩仏の時代の詩社を考察した。詩社はそれまで以上に多くかつ大規模に開設され、活発な活動を展開していたことが分かった。そして、機能面においても、前中期の詩社より多様化し、文人間のネットワークが形成された。

第七章 「化政期の詩会と出版」は江戸時代の詩会および化政期の詩会と出版の関係を論じた。第(一)節「五山禅林の詩会との連関」は江戸時代の詩会に直接影響を与えた室町時代五山の詩会を検討し、江戸時代の詩会制度を把握した。第(三)節「大窪詩仏と化政期の詩会」は詩仏が参加し、主催した詩会について紹介した。第(四)節と第(五)節は化政期の詩会と出版の関係を論じた。江戸時代のガイドブック「人名録」に記載された詩会の会日、および詩会の課題を事前に決める「課題表」について紹介し、化政年間に、出版という媒体が大いに活用され、それによって詩会の規模が拡大されていったことを指摘した。

第八章 「江戸時代の書画会―職業詩人の俗化―」は書画会を取り上げ、関連する問題について考察を加え、大窪詩仏を始め江湖詩社の同人や化政期の詩人が具体的にどのような関与していたかについて整理した。第(一)節と第(三)節では、揖斐氏が分類した「展覧会系統の書画会」と「席書・席画系統の書画会」の二種に従い、書画会の歴史を整理しながら、化政期の特徴を洗い出した。儒流詞客ならびに芸者の出席は、最終的に、書画会の俗化を招いたことを結論づけた。第(四)節「職業詩人と書画会―文人の俗化―」は化政期の書画会がすでに文人雅集から大きく離脱し、職業文人のイベントと化して、完全に俗化の道を進んだことを論じた。

第九章 「山本北山大窪詩仏の反古文辞派」は詩仏が創作において、どのように詩風を変化させたのか、そして、実際の生活のなかで、どのような手段方法を用いて当時の詩風を変えたのかについて考察した。第(一)節「荻生徂徠と「格調」説―古文辞派の盛行について」は徂徠が儒者の立場に立って、「格調」説を受け入れていたことを説明した。第(三)節

「山本北山の反古文辞派」は詩仏の師である山本北山の理論を紹介した。徂徠の復古理論は儒学本位であるのに対し、北山の詩学思想は文学本位により近く、より包括的で分かりやすいということを主に論じた。第四節「大窪詩仏の反古文辞派」は詩仏が詩人の立場から古文辞派に反対し、民間で反古文辞派の宣伝活動を行ったことを論じた。

第十章 「大窪詩仏と唐宋詩歌論争―卷大任編『宋百家絶句』序文を中心に―」は詩仏たちによる唐宋詩をめぐる闘争を取り上げ、当時の詩壇における「真詩」「偽詩」の議論を検討した。検討の対象は文化八年成書の卷大任編『宋百家絶句』であり、六人の序文を三つに分類して、当時の唐宋詩論争を検討した。第二節は山本北山と大窪詩仏の序文とその観点について検討した。北山の場合は唐対宋という対立の図式が濃厚に残っているのに対し、詩仏の詩論は規範論争を超越したことを論じた。第三節では亀田鵬斎と葛西因是の序文及び詩論を検討した。二人は北山や詩仏とは異なり、唐詩に重きを置く持論を展開していたことが分かる。第四節は館柳湾と卷大任の序文及び詩論について紹介した。柳湾の詩歌観は、「性霊説」とは相容れない部分を持っている。卷大任の姿勢は、あくまで唐詩が主であって、そこへと至る学習の階梯として宋人の絶句を用いる、というものであった。

第十一章 「大窪詩仏の『村居四時雜題十九首』―范成大『四時田園雜興』との関わり―」は詩仏が早期に於いて、田園詩を多作することを認め、その原因について、早年の詩仏は隠棲しながら詩を作るという伝統的な詩人の道を歩んでいたことを指摘した。また、詩仏の詩学的な追求の対象である南宋詩とも関係していることが分かった。第二節『卜居集』と田園詩』は詩仏の第一詩集に田園詩が多いことを指摘した。第三節「大窪詩仏の『村居四時雜題十九首』と『四時田園雜興』」はその根拠として、「村居四時雜題十九首」を選び、解釈しながら、南宋の范成大的「四時田園雜興」と比較し、両者の取材や描写手段における共通点を指摘した。

第十二章 「大窪詩仏の詠物詩―『三家詠物詩』との関わり―」は詩仏が中年頃より詠物詩を多作することに注目し、詩仏の詠物詩を中国の詠物詩史に照らして、その特徴ならびに影響関係を探り、さらに江戸期の詠物詩における変遷の跡を考慮に加える形で、詩仏の詠物詩の位相をより包括的かつ精確に描き出した。第三節と第四節は詩仏と『三家詠物詩』の関係および詩仏が三家から学んだものについて説明した。第五節は江戸詩壇における詠物詩の位置付けについて論じた。第六節はさらに中国詠物詩史における『三家詠物詩』の位置付けを説明し、この書籍が中国詠物詩の近世型の典型であったことを証明した。

○本論文の課題

今後の課題はおよそ三つの方面がある。一つはより仔細に日中の職業詩人の特色を探し出し、漢詩史における位置を定位することである。二つは詩仏の後輩である職業詩人、梁川星巖、大沼枕山などについて、研究を行なうことである。三つは、詩仏の漢詩をさらに精読して、中国の漢詩との繋がりをより正確に把握することである。